



松原 正明

Written by Masaaki Matsubara

炎を見つめる生活の価値

僕たち家族は冬枯れた雑木林に建つ小さな週末住居で2000年1月元旦を迎えようとしていた。唯一の情報源であるラジオからは、年明けとともにコンピュータのプログラム異常でライフラインが一時途切れる可能性があるとのニュースがながれている。その時期、世界中で話題になっていたいわゆる2000年問題である。外は零下にまでなる人里離れた粗末な小屋だが、僕たちは何の心配もしていなかった。食料に水、そして目の前の薪ストーブと軒下にたっぴりある薪さえあれば、しばらく世間が慌てている間、のんびりでできそうだとむしろ楽しんでさえいたのである。

今から6年前に一大決心をして、実家の近くにある福島県西郷村の里山に週末住居を建てた。自宅は賃貸暮らしのままだからちょっと普通ではないが、どうしても雑木林の中で生活する時間をもちたかった。東京での暮らしは、電気がなければ照明はもちろん、暖房、給湯、煮炊きすらままならない。子どもたちはテレビとコンピュータゲームに夢中で、食事の時間の会話は途切れがちだった。テレビの代わりに薪ストーブが中心になる暮らしをしたいと切実に思った。なによりそれが子どもたちのためにもなるだろうと思ったのだ。

山荘での暮らしは火との付き合いが中心となる。薪ストーブに始まり、火鉢、七輪、焚き火台、ダッチオーブンなど、よほど物好きな人でないと持っていないものばかりだ。それで暖を採り、湯を沸かし、食料を焼く。

灯りを暗くして薪ストーブの中でゆれる炎が家族の顔を照らす。ゆったりとした時間がながれ、家族の気持ちが寄り添うのがわかる。子どもたちは不思議なことにテレビがないことに不満は言わない。初めはおそるおそる自分たちでマッチを擦って焚き火をしていたが、最近では焼き芋を焼いたり、消えそうなストーブに薪を継いだりするようになった。薪ストーブのある暮らしが当たり前になり、火の扱いを自然に覚えていった。

人はゆれる炎を見つめて計り知れないほどの時間を重ねて来たのに、ここ数十年で火のある生活から急速に遠ざかってしまったようだ。僕たちの世代は幼い頃の記憶で、かろうじて火が持つ魅力を知っていたからこそこんな発想が生まれたのだが、子どもたちの世代はどうなのだろうか。

夕食後のひととき、テレビと電灯を消してキャンドルを灯す。それぞれに過ごしていた家族がキャンドルを囲むように集まり会話が始まる。暮らしの中から失ってしまった火を取り戻すことは、それとともに失ってしまったそれぞれの大切な“何か”を取り戻せるに違いない。

CEL

松原 正明(まつばら・まさあき)

1956年福島県生まれ。86年松原正明建築設計室を開設。自然素材を使ったシンプルで心地良い空間、自然の恵みやリズムを感じ、住むほどに愛着の持てる家づくりを目指す。薪ストーブも積極的に採用している。東京より200 km圏で住宅、別荘などの設計を手がける。

HP:<http://plaza.harmonix.ne.jp/mmatsu/>